

だが、とにかく水源を作ればいいというわけではない。今回のプロジェクトが対象としたマルサビット県には、主に、家畜の種類や生活習慣が異なる三つの部族が住んでいる。「毎日水を飲む牛を中心に飼っているボラナ族は、水が比較的豊富な地域に住み、一部では農業も手掛けているので、組合を作って水源や給水施設を管理しています。一方、給水が2週間に1度でいいラクダを主な家畜とするレンディール族は移動能力が高く、一つの地域にとどまらず水源施設などを管理することは苦手です。そうした習慣に合わせて、ボラナ族の地域では整備の手間がかかるが貯水量の大きなため池を作り、レンディール族の地域ではより小規模で管理が容易な給水施設などを作ることになりまし



今回のプロジェクトで作られたため池。多くの家畜が集まり、放牧の拠点となっている

た」と村上さんは振り返る。「**家畜は財産の考え尊重 自主的な売買を促進**」家畜の売買促進も単純な話ではなかった。干ばつが来る前に家畜を売却して現金化すれば、干ばつの影響を軽減することができる。だが、この地域では家畜は生きた財産として大切にされ、普段は必要最小限しか手放さないため、家畜マーケット自体があまり発展して

いない。そこで村上さんは、子どもを産んで家畜群を増やし、ミルクも提供してくれる雌の家畜に着目した。雌の家畜は牧民にとって貴重なだけに誰も手放したがらないので、ケニア北部の家畜マーケットで出回るとは珍しい。そこで、他の地域から出産を経験していい若い雌の家畜を連れてきて、現地の市場で売ってみたいのだ。「聞き取り調査の結果、若い雌を買った人の7〜8割が、自分の家畜を売却して現金を準備したと答えました。これまで、新しい家畜を買うために自分の家畜を市場で売る人はほほいかなかったのですが、このプログラムによって、自分の家畜を市場で手放す人が増えたわけです。私たちの狙い通りでした」と村上さんは言う。今後、他の地域の商人たちがこの地域まで雌の家畜を売りに来るようになれば、家畜の売買は活発化するはずだ。

村上さんは、地元の人々が扱っているヤギや、町近郊で近年需要が伸びているニワトリなどに注目。グループで親を育て、新たに生まれた子ヤギやひなを分け合う仕組みを作った。女性たちも、卵をより多くふ化させるために試行錯誤するなど、自発的な努力を始めている。

このほか、コミュニティの現状を少しずつ改善してさまざまな現金収入の手段を作り、干ばつへの適応力を向上させる試みが続けられている。「この地域は、これからは気候変動の影響にさらされ続けます。牧民の伝統的な生き方を尊重した支援を継続していくことが大切です」と村上さんは力強く語った。

【上】家畜は大切な財産。「売りたい」「新しい家畜を買いたい」と思ってもらうことが大切だ
【下】皆で家畜を増やして分け合う「メリーゴランド方式」は、仲間同士の絆を強化するなど、女性たちにとって親しみやすい仕組みだ

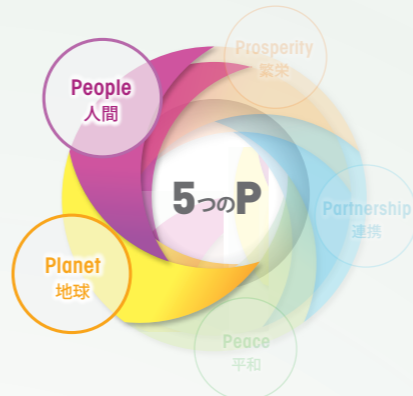


の促進、牧畜以外の収入源の確保だ。

「家畜は財産」の考え尊重 自主的な売買を促進

た」と村上さんは振り返る。そこ

村上さんは、地元の人々が扱



乾いた大地に寄り添う

「祖父の時代は20年に一度、干ばつがあった。父の時代は10年に一度。それが今は、3年から5年に一度、干ばつが起きる」気候変動により、長年続く伝統的な生活が脅かされているケニア北部。人々の生活を守る試みを追った。



住民集会で水の使い方を話し合う。地元の人たちの生き方を尊重するのが、取り組みの重要なポイントとなる



from Kenya ケニア



井戸で水を汲む子どもたち。集落近くに井戸を作ることで、女性や子どもたちが川まで水汲みに行くことから解放され、勉強や仕事の時間が生まれる

繰り返される干ばつ 家畜たちが死んでいく

「もともと、ケニア北部は雨が少なく、多くの場所ではほとんど農耕ができません。雨期と乾期のサイクルを年2回繰り返す中で育つ牧草を家畜たちに食べさせる遊牧は、この厳しい環境に最も適した生活スタイルです」と日本工営株式会社の村上文明さんは説明する。その生活が、少しずつ変わりつつある。原因は、干ばつの頻度だ。干ばつで家畜が衰弱して死ねば、人々は財産と食料を失う。それでも20年に一度の干

ばつなら、次の干ばつまでに家畜は増える。しかし、3年や5年に一度の干ばつでは、家畜の数は減っていく一方だ。

乾燥地で生きる知恵が、世界的な気候変動で脅かされつつある。村上さんらプロジェクトチームは、人々が今後の干ばつの被害を軽減できるように、彼らの干ばつに対する強靱性(レジリエンス)の向上に取り組んだ。

協力の柱は三つある。水源の確保と牧草地の有効利用、家畜売買